4 限界を突破

植菌から700日。絶望を希望に変える芽吹き

希望を乗せた絵手紙

震災から3年目の春、JAいわて平泉椎茸部会長の佐々木久助さんは思い悩んでいた。かつて400人いた生産者のうち、再生産を選択したのはわずか20人。生産者の95％は、賠償金を「退職金」に廃業を選択した。

そんな矢先、興田中学校の用務員をしていた知人から連絡があった。

「生徒が絵手紙を書いた。見に来てほしい」

美術の時間に絵手紙に取り組んでいた同校。美術の中山陽子教諭が生産現場の状況や生産者の声を伝え、2年生20人が「がんばろう大東～絵手紙に希望をのせて」をテーマに描いた。

「力強く」

「絶対負けねー」

にょきにょきとたくましく生えるシイタケのイラストや墨文字の力強いメッセージに心を奪われた久助さん。

「絵手紙を産地再生の起爆剤にしよう」

同部会は、生産再開に向け、JAの新事業「原木椎茸（露地栽培）生産再開チャレンジ事業」に取り組むことを決めた。

産地再生へ心重ねて

絵手紙を機に、生産者と生徒の交流が始まった。

生徒は、カレンダーや応援看板を作って生産者にエールを送ったほか、修学旅行先の東京で原木シイタケを販売するなど、一人一人が広告塔となって支援した。

生産者と生徒には親子のような絆が生まれ、同部会は生徒の気持ちに応えたいと15年4月、「産地再生」の願いを込めて、生徒と一緒に原木約2万本に種駒(＊5)を植菌した。

「震災とか、原発事故とか、被災したことばかりに目がいき、大事なことを見失いかけていた。自分たちは被災者である前に生産者だ。子供たちは、大切なことに気付かせてくれた。（地元産を）待っている人がいる以上、自分たちは作ることだけに集中すればいい。食卓に届いたシイタケが笑顔を生み出し、それが、結果として震災復興や王国復活に一役買うのであればうれしい」

久助さんは力を込める。

風評被害と放射能被害、見えない敵に追い詰められた生産者を救ったのは、ここで生まれ、ここで育ったたくましい子供たち。北の大地に、「絶望」を「希望」へと変える南風が吹いた。

気持ちを届け心で受け取る

植菌から700日。今秋も、ほだ木からシイタケが芽吹いた。

いわて平泉農協大東営農経済センターで9月10、11の両日開かれた「2016だいとう　ちくさん・しいたけフェスティバル」（実行委主催）には興田中3年生9人が応援に駆け付けた。

「原木シイタケおいしいですよ。いかがですかー」

声を張り上げ、客を呼び込む生徒会長の及川桜さん。さわやかな笑顔と元気な声にどんどん人が集まってくる。来場者に振る舞った焼きシイタケ200食はあっという間に品切れに。販売した原木生シイタケ100パックは即日完売した。震災から5年半。直接、消費者と触れ合った久助さんは「まだまだ苦境は続くが、絶対にあきらめない。絵手紙のように力強く、絶対負けねー」と言い切った。

生産者と生徒が重ねてきた心のキャッチボールは、消費者を仲間に加え、少しずつ広がりを見せている。世代を超えて連鎖する「気持ちを届けて心で受け取る」関係は、いざというときの瞬間も、これから先の未来という時間も、きっと、人を支え、地域を動かす力になるだろう。

次代のフロンティア

「トントン、トントントン」

北の大地に半世紀前から響く駒打ちの音だ。かつて生産者は、落ち葉の季節に山で木を切り、雪の季節に原木に穴をあけ、木づちで種駒を植えた。

「トントン、トントントン」

それは古里の日常の音だった。

しかし、5年前の3月11日。東日本大震災は、古里の日常を根こそぎ奪い去った。豊かさの指標が変わった。幸せのモノサシが変わった。

折れそうな心を奮い立たせて再生産を誓った生産者たち。小さなことから、できることから取り組んで、ここまでたどりついた。5年間、一人一人が陰に陽にそれぞれの立場や持ち場で日夜努力を重ねたことが再生産に結び付いた。

希望の種は、確かに芽吹いた。芽吹きの輪を大きく広げていくためには、逆境を乗り越えてきた強い心と被災から得た経験や知恵を財産として共有することが不可欠だ。王国復活は、その先にある。

9月中旬、大東町中川の作業場で汗を流す久助さんに会った。「ほだ木はシイタケのゆりかご」と手作業で重い原木を天地返し(＊6)するその表情は輝きを取り戻していた。

「忙しいが、張り合いがある。応援してくれる子供たちのためにも、絶対に負けられない」

あきらめない心、くじけない姿勢は、きっと、他の生産者にも勇気を与えるに違いない。

次代のフロンティアは古里にある。

佐々木久助さん

profile ささき・きゅうすけ　1953年大東町中川生まれ。JAいわて平泉椎茸部会長。原発事故前は、乾シイタケの消費拡大を図るため食育活動に奔走。小学校にほだ木を贈って栽培や収穫を体験してもらうなど、児童からシイタケのことなら何でも知っている「久（きゅう）ちゃん先生」として親しまれた

1興田浄化センターに設置されたシイタケ応援看板。「未来へ伸びろ」「すくすく育て」と書かれている／2希望が込められた絵手紙。新聞やテレビでも取り上げられ、多くの生産者の励ましになった／3「産地再生」の願いを込めた植菌／4ボランティアでイベントの接客を行う生徒たち／5興田中3年生25人が修学旅行先の東京で、地元産原木乾シイタケを販売。意志は後輩に引き継がれた

（＊5）種駒…木片にシイタケの菌を繁殖させたもの

シイタケ王国の復活

この声が届きますように

Voice

産地の再生に必要なのは生産者同士のつながり

安い外国産の流通、全国的な安値取引など乾シイタケを取り巻く環境は厳しさを増しています。出荷自粛以降、市場の反応は冷ややかです。ブランドのイメージ回復には、安全をアピールして安心してもらうしかありません。

風評の原因は、消費者が抱える不安感です。

産地としての信頼を得るためには、県が定める「放射性物質低減のための原木きのこ栽培管理に関するガイドライン」を徹底して守る必要があります。生産者同士、情報を共有してより良い方法を模索しましょう。

一日も早く、地元産の木を原木として使えるよう、関係団体への働きかけを続けます。

佐藤弘人さん

profile さとう・ひろと
1958年大東町摺沢生まれ。一関地方森林組合事業本部長

（＊6）天地返し…ほだ木の上下を入れ替え、内部の水分を均一にする作業。水分とともにシイタケの菌が循環し、シイタケが発生しやすくなる